

言葉の仕事



河原 多恵子 (かわはら たえこ)
アナウンサー

岩見沢市生まれ。北海道女子短期大学体育科を卒業し、北海道放送(株)へアナウンサーとして入社、以降、数々の番組を担当。ラジオ制作プロデューサーを経て、現在は、HBC-R「多恵子の今夜もふたり言 (月～木23:30～24:00)」パーソナリティー。番組では毎週様々な分野からゲストを迎えてインタビュー。大人のトーク番組として聞かれている。趣味は運転、旅、本、街歩き、美術館めぐり。画家・片岡球子のファン。

3月から4月初め、雪解けの頃が好きです。大地が胎動する～こんな気配が空気にも光にもあって、春が動き出した感触にウキウキします。雪解け道の歩きにくさや泥跳ねのうっとうしさを、それらが跳ねのけてくれるような気がするのです。

北海道の春。季節は行ったり来たり、綱引きをしながら、ある日気がついたらきっぱり春だった、こういう年がありますね。雪解けは、大地が春に向かって胎動を始めたサインと思っていますので、こちらも張り切ってしまいます(笑)。あれもこれもしたい、桜も見に行こう、花の数え方の単位は何だった?手帳を引っ張り出して確かめ、負けずに胎動しています。

水溜り、氷割り、雪白水の沢、草花と木々の芽吹き、それを見つけた時の嬉しさは今も昔も変わりません。細やかに季節がめぐる北海道。春夏秋冬だけで言いあらわすのはもったいないと、この季節、いつも思います。

春は黒?

歌手のさだまさしさんにインタビューしたときのことです。話題は春の色に。全国各地をコンサートで訪れるさださんは、ステージから「この春は何色なの?」と、行く先々で聞くそうです。答えのほとんどがピンクとグリーン。桜や若葉の時期だから当然の答えでしょう。では「ここ、北海道の春色は?」。ある時、コンサートでこう問いかけると、しばらくして、会場から「黒」という声が上がったそうです。「春が黒?」と驚き、その理由を聞いてなるほどと思ったといいます。「雪解けが進んで大地が顔を出すと嬉しくなる。黒い土を見つけると春。だから自分の春色は黒」と。この説明を聞いて感動したと話してくれました。確かにそうです!

この話を聞いてから、私も仕事先で、「この春は何色ですか?」と聞いてみるがあります。漁師の男性は海の色を、農家の女性はビニールハウス。地域によって、また人それぞれ、春を感じる色があるでしょう。北海道の大地をあらわす黒も加えて、今年、あなたの春は何色でしょうか?

聞く・聴く・訊く

パソコン・携帯電話・メールなどなかった頃から、女子アナブームのずっと前から、言葉の仕事をしています（笑）。当初は原稿も書類も伝票もすべて手書き。自分の悪筆を棚に上げ、渡された原稿に判読不能な字があったときはドッキドキでした。そして、テレビ番組の「枠」も生放送。十秒の原稿を何千回となく練習してのぞんだデビュー戦。正しく読めず、頭のとっぺんから声を出して落ち込んだ新人時代です。

その頃からの愛読書が「日本語アクセント辞典」。この辞典はベテランにとっても必需品で、「そのアクセント、間違えてるんじゃないのお〜」と、誰かの言葉に地獄耳が反応すると開き、必ず裏を取り（笑）、こっそり指摘。ある時は、主語・述語、助詞や形容詞、助数詞をジグソーパズルのように組み合わせ遊んでいます。この辞典は読み物としても面白く、友人知人に薦めているのですが、読んだという報告はまったくありません。

言葉は生き物でドンドン進化しています。若い頃、赤い線を引いて覚えたアクセントが最新版の辞典ではどちらも可となってガックリ…。しかし、生き物を扱うのはとても面白く、聞きなれない流行語や若い人たちの言いまわし、省略語を聞けば、どういう意味かと質問。その中には、絶対に使いたくないものもありますが！

話を戻します。すべて手書きの時から年月を経て、周辺の道具や機械はアナログからデジタルへ移行するなど（地デジの準備はお済みですか？）大きく変化しています。その中で変わらないものは何かときかれましたら、「きく」ことと答えます。誰でも持っている「あなたの話を聞きたい・もっと聴きたい・訊きたい」という気持ちです。私たちの仕事は、最初から最後までしゃべっていると思われがちですが（笑）、本来は相手の話を「きく」、しゃべってもらうことからスタートします。

そして、「聞く・聴く・訊く」、聴きまくり（乱暴な

言い方ですみません）伝えます。「きく」行為は、単に聞く、耳を傾けて聴く、疑問を持って訊くことですから日常会話と同じですね。生活の中で、「耳に心がともなってハートで聴く」ことをみんなが意識したら、社会から無関心が消えるのではないかと思います。

花の数え方

数年前、念願の松前の桜を見に出かけました。

公園から見る桜とお城と海の情景が素晴らしくて感動。桜木を守り育てる地元の皆さんの愛情や誇りが伝わります。桜を堪能して、ふと思ったのが花の数え方。固い蕾つぼみやほころびかけた蕾、散るさま、見事な枝、そして枝垂桜といろいろあるのに、すべて「個」で数えて良いはずがない。言葉の虫が蠢うごめき始め、道中、あずましくないこと！

蕾のときは一個・二個、ほころんだら一輪・二輪、枝はひと枝・ふた枝で、花びらは一枚・二枚、舞い散るときはひとひら・ふたひら…。では、枝垂桜のように花が垂れ下がる枝は？一朶いちだ・二朶にだ。知って胸のつかえがとれました。桜に限らず、ものには美しい単位があります。「使わずにはいられない」と、言葉の虫は四六時中、うごめきます？



松前の桜（2007年撮影）